UNIC Tokyo
Dateline UN
November 2001 Vol.26
国際連合広報センター

国際連合とアナン事務総長にノーベル平和賞

The Nobel Peace Prize

【写真上】ノーベル賞の授賞式は12月10日、ノルウェーの首都オスロで行われる（写真は1988年、国連平和維持活動が平和賞を受賞したときの様子）

【写真左上】ノーベル平和賞の発表を受け、国連事務局ビルでスタッフと喜びを分かち合うアナン国連事務総長とナーネ夫人

コフィー・アナン事務総長　国連総会演説

ノーベル平和賞委員会の決定は、国連全体にとって真の名誉です。これはもちろん、国連の全加盟国と、これを代表する総会にとっての名誉です。また、国連の各部局、とりわけ、世界中の献身的なスタッフ全員にとっての名誉でもあります。

国連職員は、世界をより公正で、より平和で、より幸せな場所とできるよう、日夜懸命に努力しています。その生命を危険にさらしているスタッフも多くいますが、このような職員こそ、この受賞に十分に値すると言えましょう。

１年前、皆様方各国の首脳はミレニアム・サミットで、「人類という家族全体の共通の家」として不可欠な国連の役割を再確認しました。そして今、ノーベル委員会は、その言葉を借りれば、「世界の平和と協力を話し合いで実現する唯一の道は、国連を経由するものであることを宣言する」ために、この賞を授与したのです。

より密接に、相互の結びつきを強めながらも、依然として残忍な紛争と冷酷な不正によって引き裂かれている世界の中で、人類がこの道を歩むこと、そして、私たちすべてがこれからの道を築くために懸命に努力することが、これまでに増して重要となっています。

国連で働く私たち全員はきょう、誇りを感じながらも、今後はさらに多くのことが私たちに期待されることを考え、謙虚な気持ちを大切にします。

ノーベル平和賞はとりわけ、人道に奉仕するためにこのような犠牲を払った同僚たちへの捧げ物です。彼らにとっても私たちにとっても、ただ一つの本当の賞は、平和それ自体なのです。（2001年10月12日）

INSIDE

国際連合とノーベル平和賞　2・3
2001国連デー・メッセージ　4
ゲエノ国連ＰＫＯ担当事務次長、来日　5
「国連文明間の対話年」とは　6
国連地域開発センター・シンポジウム　6
サリム国連本部人事局長、来日講演会　7
オギ スポーツ国連事務総長特別顧問、来日　7

http://www.unic.or.jp/

広報資料ー公式文書ではありません　vol.26　2001年11月

国際連合とノーベル平和賞

ノルウェーのノーベル委員会は10月12日、百周年を迎えた2001年のノーベル平和賞を国際連合とコフィー･アナン事務総長に授与すると発表しました。

ノーベル賞の寄贈者であるアルフレッド・ノーベル氏は、その遺言で、過去１年間に「人類に最大の恩恵をもたらした」人々にこれらの賞を授与すべきこと、また、賞のうちの１つは「国家間の友愛、常備軍の廃止あるいは削減、および、和平会議の開催と促進に最大あるいは最善の貢献を行った」人々に授与すべきことを記しています。

今回の受賞を機に、これまで国連システムが受賞したノーベル平和賞を振り返ります。

国連システムはこれまで5回にわたり、ノーベル平和賞を受賞しています。

- 1988年、国連平和維持活動が受賞。
- 1954年と1981年、国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）が受賞。
- 1965年、国連児童基金（ＵＮＩＣＥＦ）が受賞。
- 1969年、国際労働機関（ＩＬＯ）が受賞。

1988 United Nations Peacekeeping Operations

1988年に平和賞を授与した国連平和維持活動

1988年に平和賞を授与する際、ノルウェーのノーベル委員会は「国連の平和維持軍は、きわめて困難な条件下で、休戦合意が成立したものの、平和条約が確立していない場合における緊張の緩和に貢献した。このような状況で、国連軍は、話し合いで和平を実現するという国際社会の明確な意思を表示し、その存在によって実際の和平交渉を開始する上で決定的な貢献を行った」と述べました。

授賞式でハビエル・ペレス・デクエヤル事務総長は、平和賞とそれによる注目が「国際的な事柄をより平和で公正なやり方で運営する私たちの能力を強化するだけではなく、私たちに共通の将来を保障するために必要となる新たな手段と、新たな制度を検討するためのさらに幅広い努力を刺激するものと期待する」と述べました。

授賞式にのぞむハビエル・ペレス・デクエヤル事務総長（中央）

1954 1981 United Nations High Commissioner for Refugees

1981年、ＵＮＨＣＲに２度目の平和賞を授与するにあたり、ノルウェーのノーベル委員会は、世界には「おびただしい数の難民がおり、しかもその数は増え続けている」と述べた上で、「私たちはまさに、肉体的にも精神的にも、人的な災害と惨禍の洪水に直面している」と付け加えました。こうした中で、ＵＮＨＣＲは「多くの政治的困難への対処を迫られながらも、難民を援助するための極めて重要な作業を遂行した」のでした。

1965 United Nations Children's Fund

ＵＮＩＣＥＦの受賞は1965年。ノーベル委員会のアーセ・リオネス氏は授賞式で、ＵＮＩＣＥＦは「平和のきわめて重要な要素である。ＵＮＩＣＥＦは将来への鍵を握るのが子どもたちであること、つまり、今日の子どもたちが将来の歴史を作ることを認識している。ＵＮＩＣＥＦは今、豊かな国々と貧しい国々の間に連帯の架け橋を設けつつある」と述べました。

1969 International Labour Organization

1969年、創設50周年を迎えるＩＬＯに平和賞を授与する際、アーセ・リネス議長は、「平和を望むのなら、正義を育てよ」というその根本的な道徳的思想を実行に移す上で、ＩＬＯほどの成功を収めた機関はほとんどないと述べました。同議長はまた、社会的正義を求める声が、「50年前のＩＬＯの創設によって大きな勢い」を得たと付け加えました。

事務総長の受賞

コフィー・アナン氏は、ノーベル平和賞を受賞した２人目の事務総長です。国連の第２代事務総長、ダグ・ハマーショルド氏は1961年、国連の強化に尽した活動を評価され、没後に平和賞を受賞しました。ハマーショルド氏の受賞は、コンゴでの和平ミッション中、ンドラ（現在のザンビア）付近での航空機墜落事故で同氏が死亡してから数カ月後に決定しました。

ダグ・ハマーショルド第２代国連事務総長

ダグ・ハマーショルド氏は1961年、ノーベル委員会のグンナル・ヤーン氏が授賞式で述べたとおり、「国家と人間の間に平和と善意を作り出すために同人が行ったすべてのこと、同人が達成したこと、そして同人が勝ち取ろうとしたものに敬意を表し」平和賞を授賞しました。ヤーン氏によれば、ハマーショルド氏は「当初から自分の選んだ道、つまり、国際的な感覚と行動力を備えた人々が奉仕する強力な事務局によって運営され、国連憲章に謳われた原則に生気を与えることのできる実効的で建設的な国際機関へと国連を発展させる道から、決して外れることがなかった。同氏が常にめざした目標とは、国連憲章をあらゆる国々が自らを律する拠り所とすることであった」。

国連に直接関係する活動により、個人がノーベル平和賞を受賞したケースも多くあります。

- 米国のコーデル・ハル国務長官は1945年、主として同人および米国の国連創設に際する強力な指導力を評価され、受賞。
- 英国のジョン・ボイド・オア卿は1949年、国連食糧農業機関（ＦＡＯ）の初代事務局長として、同人の科学的発見が「国家間の協力を促進する」ために用いられたことを評価され、受賞。
- パレスチナでの国連の代理調停者を務めたラルフ・バンチ氏は1950年、1949年の戦争当事者間の休戦取り付けを評価され、受賞。
- レスター・ピアソン氏は1957年、主としてスエズ紛争終結と国連を通じた中東問題解決への努力に果たした役割を評価され、受賞した。カナダの外相として、同人は当時、国連を主導する政治家の一人。

ラルフ・バンチ氏（中央）

コフィー・アナン
国連事務総長メッセージ

国連ファミリーの各メンバーにとって、そして、国連の理想を信じるあらゆる人々にとって、2001年の国連デーは特別な日です。国連は今年、平和を促進し、人権を擁護し、貧困と闘う活動を認められ、ノーベル平和賞を受賞しました。

国連では皆、この受賞を名誉と謙遜をもって受け止めています。このことが、より一層の決意をもって私たちが任務に当たることを促すものと期待します。私は、国連が前進を遂げる中で、世界の人民である皆様の協力に頼ることができることを知っています。国連は皆様自身であり、私たちは皆様に奉仕すべく存在しているのです。

2001年国連デーのきょう、私は国連ファミリー全体に対し、自らの任務に忠実であること、そして、世界各地での惨禍を軽減すべく、これまでにも増して一層の努力を行うことを求めます。世界は新たな挑戦に直面していますが、古くからの課題も残っています。国連は万人にとってよりよく、より安全な世界を作り出す上で、かつてなく中心的な立場に立っているのです。

UN Day 2001

2001国連デー（10月12日）

ＵＮギャラリーへのお誘い

国連広報センター所長　高島肇久

国連とその様々な機関は、日本に22カ所の事務所を置いています。これらの事務所と国連ファミリー全体の活動の広報を行うため、2001年4月3日、東京の渋谷に新たな施設として「ＵＮギャラリー」がオープンしました。ギャラリーはUNハウス（国連大学本部ビル）の１階と２階にあります。

UNハウスは、世界的に知られる日本人建築家、丹下健三氏の設計により1992年に建てられました。それ以来、ピラミッドや寺院にも似たユニークな形を持つこの建物は、東京でも有名な場所の１つとなっています。

今年１月下旬の来日の際に、コフィー・アナン国連事務総長はナーネ夫人とともにこのビルを訪れ、国連システムと日本の人々の接点となるべきものとして、これを「UNハウス」へと改称しました。事務総長は同時に、日本全国の国連事務所のスタッフに対し、日本の人々に国連と各機関の活動を知らせ、国連ファミリーに対する一般の支持を高めるため、協力して最善を尽くすよう明確な指示を出しました。簡単に言えば、「国連を日本の皆さんに近づける」ということです。この指示を受けて開設されたUNギャラリーでは、これまでに5回の展示が開催されています。

「国連文明間の対話展」オープニング・セレモニーであいさつする高島所長（写真提供・日本国連協会・東京都本部）

10月10日からは、「国連文明間の対話展」と題する新しい展示が始まっています。このイベントはもちろん今年2001年の「国連文明間の対話年」を記念するもので、国連教育科学文化機関（UNESCO）が中心となっています。この展示会は、日本で最も有名な画家の一人で、UNESCOの親善大使でもある平山郁夫氏をはじめ、多くの方々からのご厚意によって実現したものです。

展示は、危機にさらされている世界遺産、今年になってタリバンによって破壊された仏像をはじめとするアフガニスタンの文化遺産、および、「文明間の対話」の歴史と意義のイラスト付き解説という３部構成になっています。開催1週間で、1日あたり100人を超える来場者がありましたが、この数は着実に増加しています。これは、東京の方々が「文明間の対話」という国連のキャンペーンに対する関心を高めていることの表れだと言えるでしょう。米国に対する大規模なテロ攻撃と、これに続くアフガニスタンに対する軍事行動により、人々は民族性、地域あるいは文化の差異を通じ、お互いを認識、尊重および理解することを求められているのです。ある30代の来場者は、爆破前と爆破後の大きな仏像の写真を見て、思わず涙がこぼれそうになったとの感想を漏らしていました。

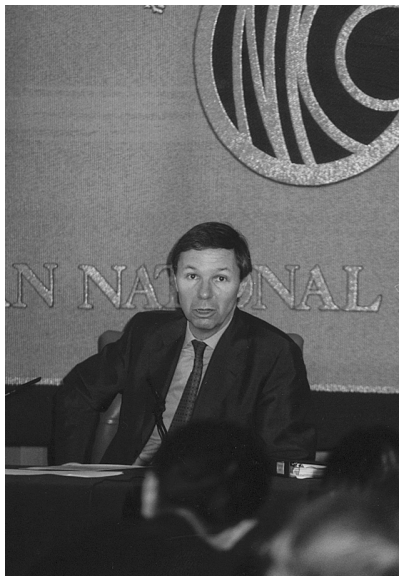
大小問わず数百の博物館とギャラリーが様々な興味深いアトラクションでしのぎを削るこの東京で、UNギャラリーは生まれたばかりの赤ん坊のような存在に過ぎません。しかし、小さく無名であっても、UNギャラリーは日本での魅力ある国連のショーケースになろうと、懸命に努力しています。

（本文は10月24日のジャパンタイムズに掲載された寄稿文を翻訳、転載したものです）

国連ＰＫＯ担当事務次長、来日

10 月 21 日より 3 日間にわたり、ニューヨークの国連本部からジャン＝マリ・ゲエノ国連ＰＫＯ担当事務次長が来日し、講演会をはじめ記者会見や政府関係者との懇談を行いました。翌 22 日には与党安全保障プロジェクト・チームのメンバー約 10 名との懇談に臨み、その後、日本記者クラブで記者会見、また福田康夫官房長官、中谷元防衛庁長官との会談も行いました。10 月 23 日にはＵＮハウスでの 2001 年国連デー記念会議「国連平和活動改革・平和維持研修活動への新たな挑戦」においてゲストとして基調講演を行い、午後は山崎卓自民党幹事長、冬柴鉄三公明党幹事長、杉浦正健外務副大臣と個別に会談しました。

記者会見でゲエノ事務次長は、まずブラヒミ・パネル報告書（アルジェリアのラフダール・ブラヒミ元外相を議長とし、計 10 人で構成される国連平和活動に関するパネルが 2000 年 8 月に出した報告書）に関して説明しました。「平和執行活動と平和維持活動とは異なるものです。前者は湾岸戦争の場合のように数カ国の意思、時には国連安全保障理事会によって承認されると言う形で実施され、国連自体がその実行を担うことは能力的にも無理であり、そうすることは望まれてはいません。平和維持活動も軍事力を持っていますが、それを使うべきではないことを説得する最上の策として兵力を示しています。よって各部隊がお互いに協力して、連帯による一貫した軍事力になることが重要です。このように軍事力と力を誇示することによって、関係者に対し和平合意を踏みにじるようなことにならないように説き伏せているのです。つまり強じんな兵力をもって関係者に約束を守らせるよう明白なメッセージを送ることが必要なのです。兵力を強化した最近の例がシエラレオネでのＰＫＯです。武力行使はこのミッションの主目的ではなく、部隊の提供国もそのような役割が期待されていることを欲してはいません。部隊はその場で戦争をするためではなく、国連旗を掲げながら反政府勢力がいかなる軍事行為も控えるよう説得するために駐屯しているのです。平和執行的な要素がある場合、それは国連軍の外で行われます。たとえばイギリス軍の指揮の下でイギリス部隊が遂行する、これは国連の平和維持活動とは異なります」。



記者会見に臨むジャン＝マリ・ゲエノ国連ＰＫＯ担当事務次長（写真提供・日本記者クラブ）

また、タリバーン後のアフガニスタンに関して、国連と日本の役割について氏は以下のように述べました。「国連事務総長はブラヒミ氏を彼の特別代表に任命し、国連の政治・人道努力の調整を行っています。ブラヒミ氏は 2 年前も政治ミッションの当地の特別代表であり、アフガニスタンを良く知っています。平和維持活動を熟知しており、どのような時に平和維持活動が妥当であるか、そうでないかを決める条件を知っています。アフガニスタンのように戦争によって疲弊した国を助け復興するのは国連の役目でしょうが、具体的な国連の関わりの形態に関してはまだ言及すべき時期に来ていません。戦争はまだ続いており、どのような政治条件におさまるのかを今の段階で見極めることができないからです。ブラヒミ・パネル報告書にもあるように国連の平和建設ミッションは、ある一定の条件の下に設置されなければなりません。この条件は日々変化しています。ですから国連の関わりの形態に関して言明できないのです。はっきりしているのは、アフガニスタンは国際社会からの人道と復興に関して最大限の支援を必要としているということ。そしてこの点で、日本は地雷の撤去やその他の面で既に重要な役割を果たしており、今後どのような形態に落ち着こうとどのような形で国際社会の援助が必要とされても、戦争終了後は日本はとても重要な役割を果たすことになるでしょう」。

2000 年 7 月、フランス人のゲエノ氏はアナン国連事務総長によって PKO 担当事務次長に任命された。それ以前はフランス外務省に勤務し、政策企画部、在米フランス大使館文化部長、政策企画部長、西ヨーロッパ連合フランス代表大使を歴任。外交、国防、国際関係の分野、また行財政においても多くの経験を有している同氏は、「国防白書」（1994 年）担当委員会の委員であり、また 1998 年から高等国防研究所長を務め、1999 年から軍縮問題に関わる国連事務総長の諮問理事会のメンバーだった。

国連文明間の対話年とは？

United Nations Year of Dialogue among Civilizations

文明間の対話とは何でしょうか。世界には2つの類の文明があるといえます。１つは多様性を脅威と捉えるもの。もう１つはこれを機会と捉え、成長に切り離せない要素と考えるものです。文明間の対話年は私たちに対し、多様性を改めて考え、包含を前提とした新たな関係のシステムを模索することを促しています。ですから、文明間の対話年の目標は、可能な限り紛争を防ぐ一方で、懐の広い対話を作り上げていくことにあります。

このため、政府、国連システム、および、その他の関係国際機関と非政府組織は1998年11月、国連総会から、文明間の対話の理念を促進する文化的、教育的および社会的プログラムを計画、実施するよう促されました。第56回総会では、「2001国連文明間の対話年」を記念し、そのフォローアップ行動を検討します。

「文明間の対話」を最初に提唱したイランのハタミ大統領（左）と堅い握手を交わすアナン事務総長

(以下は事務総長メッセージの抜粋です)

「国連はそれ自体、対話は不和を克服することができ、多様性は普遍的な美点であり、世界の人々はその異なるアイデンティティーで分裂しているのではなく、その共通の運命で結びついているのだという信念の下に創設されました。

その能力をいかんなく発揮すれば、国連はまさに文明間の対話の場、すなわち、このような対話が活発になり、人間の試みのあらゆる分野で結実するような話し合いの場となることができます。すべての国々の間（それぞれの文明、文化および集団の内部とその間）で日々このような対話が行われなければ、いかなる平和も続かず、いかなる繁栄も確保できません。これが国連の最初の半世紀で得られた教訓です。そして私たちは、危険を覚悟でこの教訓を無視しているのです。

この歴史はまた、文化の無限の多様性とともに、寛容と自由という共有の価値観に基づく一つのグローバル文明が存在することも私たちに教えてくれます。それは、反対意見に対する寛容、文化的多様性の祝福、基本的で普遍的な人権の擁護、そして、あらゆる場所の人々が自分たちの統治方法について発言権を持つという信念によって定義づけられる文明です」

国連地域開発センター：「文明間の対話年」シンポジウム開催

「国連文明間の対話年(2001年)」を記念して、国連地域開発センター(ＵＮＣＲＤ、本部・名古屋市、木村洋所長)主催のシンポジウム「地球で語ろう！平和の文化を育むために！」が10月25日に名古屋市の愛知芸術文化センターで開かれました。

基調講演で、高島肇久国連広報センター所長が、「21世紀の国連と日本」と題して、米国同時多発テロに関連した国連の動きやアフガニスタン情勢をはじめ、国連が今年を「文明間の対話年」に制定した背景などについて解説するとともに、21世紀の国連のあるべき姿や日本の貢献方法について話しました。また、国連開発計画親善大使の紺野美沙子氏が「開発の現場を訪ねて感じたこと」と題して、パレスチナを視察した様子をスライドで紹介しました。

講演後、参加者を交えたディスカッション「輪になって話そう」では、多くの若者から、異文化尊重の重要性、日本のＯＤＡとＮＧＯ、日本の開発教育、児童労働、児童買春、などに関して活発な質問や意見があり、紺野氏、木村氏、高島氏はそれら一つひとつに対してコメントを述べました。このシンポジウムには、学生、社会人、主婦ら約200人が参加しました。

「地球で語ろう！平和の文化を育むために！」記者会見の様子。左から木村洋国連地域開発センター所長、高島肇久国連広報センター所長、紺野美沙子国連開発計画親善大使、清水久継国連開発計画次席代表（写真提供・ＵＮＣＲＤ）

シンポジウムに先立って行われた記者会見では、報道団から日本のＰＫＯに対する国連の評価などに関して質問がでました。

国連本部人事局長の来日講演会

「国連が求めているのは、想像力と実行力がある有能な人材です」。11月8日午後、国連大学の国際会議場ウ・タント ホールに集まった150人余の聴衆を前に、国連本部の人事担当責任者ラフィア・サリム事務次長補は予定の時間を大幅に超えて熱心に語り続けました。

「国連職員になるにはまず、世界中で一斉に行われる競争試験にパスしていただく必要があります。受験資格は大学卒業つまり学士号となっていますが、世界各国の受験者の多くは修士号保持者であるので、学士号だけでは不利といわざるを得ません。語学は、国連のワーキング・ランゲージの英語かフランス語が必須で、両方なら有利。その他の国連公用語（スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語）ができることはプラス要因と判定されます。競争試験に受かると国連の採用予定リストに名前がのり、何カ月か待つうちに“どこそこのポジションが空いたが受けるか”という打診がきます。競争が激しいので、あまり好き嫌いを言っていると就職できなくなります。最初のポストでの任期は大体2年。次はおそらく開発途上国に回っていただくことになります。先進国と途上国の両方の仕事を経験することで、国連職員としての能力が磨かれるのです」。

サリム局長の話は極めて具体的で、会場に集まった大勢の学生たちは一生懸命メモを取っていました。講演に続いて行われた質疑応答もすべて通訳なしの英語のやりとりでしたが、多くの方々がしっかりとした質問をしてサリム局長を感心させました。

講演中のラフィア・サリム氏
（写真・日本国連協会東京都本部）

中でも関心を集めたのはＪＰＯ（ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー）制度と国連職員との関係についてのやりとりでした。サリム局長は「JPOは日本政府の費用で国連諸機関に２年間派遣されるが、国連本部とは関係はなく、したがってJPOの経験は国連職員になることとは全く関係ありません。JPO のねらいは国際機関に働く経験を得ることであり、その経験は将来の仕事に役立つほか、履歴書に書き込むことによって有利なポイントになることが考えられます」と話していました。

競争試験や JPO など国際機関の人事問題に関するお問い合わせは、外務省の国際機関人事センター（Tel： 03-3580-3311 内線2841）にどうぞ。

スポーツ国連事務総長特別顧問、来日

記者会見にのぞむアドルフ・オギ氏

開発と平和のためのスポーツ国連事務総長特別顧問を務めるアドルフ・オギ元スイス連邦大統領が来日し、長野市で開かれた「第４回ＩＯＣスポーツと環境会議」をはじめ、関連会合に出席しました。1945年の国連創設以来、いくつかの国連機関はスポーツを基盤とし、スポーツの持つ建設的な影響を国連の活動と理念に活かすよう努力してきましたが、系統立った取り組みに欠けていました。そのためアナン事務総長が元スイス大統領であり、国防・民間防衛・スポーツ大臣も務めた経験を持つオギ氏を現職に任命したのです。

11月6日、東京港区のスイス大使館で行われた記者会見で、オギ氏はＵＮＤＣＰ（国連薬物統制計画）の親善大使を務める旧ユーゴ出身のＮＢＡ選手らを例にあげ、「薬物、暴力、犯罪の撲滅にスポーツは重要な役割を果たす」と述べました。またスポーツの中でも特に「チーム・スポーツ」が子どもの成長にもっとも重要であり、「相互理解の精神」を培う上で大切であるとしました。

開催まで200日足らずとなった2002年日韓共催ワールドカップの関連イベントとして、大会開始の１～２週間前に、日本、韓国、北朝鮮の15歳以下の男女20人ずつを集め、サッカー教室を開催する動きがあることを明らかにしました。

UN ギャラリー 特別展示のお知らせ

2001 世界エイズデーキャンペーン
— Let them live with dignity —

昨年エイズで亡くなってしまった軍人の夫から感染した女性（カンボジアのプノンペンで）

Photo by Andy Rain

12月1日の世界エイズデーに合わせ、UNギャラリーでは「2001 世界エイズデーキャンペーン・アンディ・レイン写真展」を開催します。

過去20年間に、5,600万人がＨＩＶに感染しました。これはイギリスの人口にほぼ匹敵します。これまでエイズに関連した疾病で死亡した人はおよそ2,200万人、そのうち430万人が子どもです。昨年、全世界でＨＩＶ/エイズによって亡くなった人の数は300万人にも及びます。

今回の特別展を主催する特定非営利活動法人「シェア」（国際保健協力市民の会）は、世界エイズデーのキャンペーンにあたり、“Let them live with dignity”をテーマに、アンディ・レイン氏の写真展を行うことになりました。イギリス人写真家のレイン氏は、数年前からタイやカンボジアでＨＩＶ/エイズに感染して生きる人たちの姿をカメラでとらえてきました。

ＵＮギャラリーに展示される約20点の写真を通して、特に日本の若者たちに、アジアの現状を伝えるとともに、感染者も私たちと同じ尊厳を持って生きる人間であること、そしてＨＩＶ/エイズの問題は誰かの問題ではなく、“自分たちの問題”であることに気づいてもらいたいと考えています。

期間：11月29日（木）～12月7（金）＊土日閉館
時間：10：00～17：30
場所：ＵＮギャラリー　（ＵＮハウス１階ロビー）

子どもたちによる難民のための絵画展

食糧などの配給物を受け取るためのカードをもらうアフガン難民の列（パキスタンのジャロザイで）
UNHCR/C.Shirley

11月23日開催予定の「難民のためのアート・ワークショップ」で子どもたちに描いてもらう絵の一部を展示する特別展が開かれます。

「子どもたちにもっと難民について知ってもらいたい」という考えから生まれたワークショップとその絵画展。ＵＮＨＣＲ制作の難民のビデオや、難民がキャンプで実際に使用している生活用品、難民の写真などを見て、子どもたちは何を感じ、表現してくれるのでしょうか。

期間：11月26日（月）～12月27（金）＊土日閉館
時間：10：00～17：30
場所：ＵＮギャラリー　（ＵＮハウス２階）

発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70　UNハウス8階

TEL: 03-5467-4451　　FAX: 03-5467-4455

URL: http://www.unic.or.jp /　E-mail: unictok@blue.ocn.ne.jp